

開国と「対訳」辞書

—異文化相互理解の証し—

堀 孝彦

はじめに

わが国初の本格的な英和辞書といわれる『英和対訳袖珍辞書』(幕府洋書調所 文久2年刊)の原稿が約150年ぶりに一部発見された。その影印本をもとに『解説「英和対訳袖珍辞書」原稿』を三好彰氏と共編し解説もつけたが、このさいより広い視野から、維新開国に際しての二カ国語辞書の問題を考えてみたい。

従来わが国でも、漢字を引く「字引」は節用集(日用辞書)の形で存在していたが、明治中期(明治24年)にいたって漸く『言海』という近代的な国語「辞書」が登場した。それが近代国民国家の形成期に誕生したのは、「辞書は文明を体現する」との観念が生まれていたからであり、それに対応したものであった。しかし、それは外国語辞書の翻訳を契機とし、それを手本に生まれたものであった(白川静『字書を作る』平凡社2002)。

この最初の「国語」辞書に先んじて、日本では、まず本格的な外国語辞書、即ち『英和対訳袖珍辞書』が編纂された。この事実ほど日本の《近代化》を象徴するものはあるまい。しかも最初の国語辞書『言海』でさえ、当初は国家事業として企画されたものの、のちに大槻文彦が引き取って個人の事業として完成されたのに反して、英和辞書の方は国家の中核たる幕府の国家事業として、蕃書調所で開始され完成させられていったのである。なによりも対外的諸関係

を優先せねばならなかった幕末の事情が、ここにみられる。内容的にも、世界観の転換には外的モデルを必要とした。

1 蕃書調所の二側面

調所のたび重なる呼称変更について、勝俣詮吉郎(1914)は「学問といへば漢学で、……夷狄の蕃書を調べる所を学校などとは以ての外」といていた当時、「蕃書調所」から「洋書調所」へ、最後に「開成所」となる「数次の改名に既に新思想が破竹の勢を以て旧思想を打破しつつあったといふ経路を画き出した一つの鳥瞰図が歴然として見られる」と述べている。その通りではあるが、この幕府直轄高等機関は維新後の大学南校をへて東京(帝国)大学にいたり現在におよんでいるから、純粋な教育・研究機関と思われがちであるけれども、実は「極めて特定の目標をもつ政府直轄調査研究機関」(宮地正人1997)というべきものであり、そのことは海防掛に異国応接掛を兼ねさせ(安政3年6月)、後者に調所の設立を準備させて、講武所(西洋流武事)という軍事教練機関と並置されていたことでも分かる。調所は海防掛の管轄内で設立され、教育政策も軍事的海防の一環であった*。

*この延長上に、維新後の「国家ノ須要ニ応ズル」(帝国大学令1886)教授の場としての大学が位置づく。その発端は老中主座・阿部正弘の幕政改革意

見（安政元年5月）に含まれ、海防関係者の方からは西洋の「軍学・砲術・人情其外之儀」が要請され、軍事（兵器研究）と外交（翻訳、広義には文化摂取）との両面が拮抗することになる。幕府にとって「直接に役に立たなければならぬ性格」をもたされる以上、たえず調所は政治的要請に翻弄され、具体的には調所（開成所）と外国奉行所との緊張関係——調所から外国奉行所へのスタッフ流出に代表される。——が生まれる。「開成所の軍学校への全面的転化要求」に呻吟せざるをえない。

地役人として職務に縛られていた長崎の通詞は、志せば蘭学・英学の研究者を目指し真理に仕えることもできたが、同時に権力との間に軋轢が発生する。これは主として彼らが——自立した「知識人」の成立へと向かう——初めての経験に発すると思われるが、大学の自治制度もまだない幕末で、学問の自由と近代的な権力との間の対立に悩むのは、幕府直轄の蕃書調所においても同様であり、そのスタッフになり士族となった堀達之助のばあいも同様であったろう。

しかし、ハリスの宿舎に当てられたり、シーボルトの訪問を受けたりした例もあるところをみると、調所が外交機関であったり文化交渉機関でもあったことを示している。全面的に幕府の軍事機構のなかに包摂されてしまったわけではない。いかに軍事優先ではあれ、そこは教育・研究というより普遍的な次元を含む世界のことである。だから一層警戒もされたのである。

蕃書調所が開校にあたり、「年齢ニ拘ハラズ勝手次第罷出、稽古可被致候」（安政3.12.4）と打ち出したことに対して、開明派に属する海防掛勘定奉行・川路左衛門尉聖謨と水野筑後守忠徳といった当時の革新官僚でさえ、——こ

の水野こそ堀達之助をリュードルフ事件で取り調べ下獄させた本人だった——連名で上申書「蕃書調所の件」を提出した（安政3年12月）。これは、かれらが危惧したのは奈辺にあったかをよく示す文書であるので、読み下すと、

「西洋各国は商売の法をもって組み立てられた国風だから、その極、君臣之儀を廃し、我が国のように義を尊び主を重んじ、万世神孫之御代しろし召す風俗とは雲泥の相違がある。新奇を好む人情から彼国を尊敬致すようになる。開国尊信ノ余弊恐ルベシ。今般、年齢の差別なく蘭学稽古ができるように仰せ出されているが、幼年のものハ何事もよく覚え、其風ニ化けるものであるから、心の底より蘭人の通りニ相成、遂に邪宗をも尊び、聖人の道より上なるものと心得るに至る。」

まことに「開クベキモ蘭学、恐ルベキモ蘭学」というわけである。

「開ク」必要を人一倍痛感していた彼らが、それだけに「余弊を恐れ」たのであった。この ambivalent な両面価値感情のうちに時代の空気がよく現われている。

「幕末」日本におけるような「開国」経験は、「鎖国」あつてのことであり、同様の経験は朝鮮半島、中国など東アジアに特有のものである。西欧においても近代化の時期に地域差が生じたが、これはせいぜい先進、後進の差に過ぎない。そして開国は、ただ国を開けば良いといった単純なものではなく、国民国家という新しいシステムが分解してしまわないためには、同時に「閉じる」方向の動きをも必然的に伴わざるを得ない。強力に求心力を発揮できる内部統合の仕組み（たとえば近代天皇制の確立）、つまり「閉じる」方向と相俟つことなしには到底不可能であり、開きつつ閉じ、閉じつつ開く複雑な舵取

りを要した。これは社会、文化の急激な変革期に求められる一般的要請でもある。

古賀謹一郎・頭取の開明主義は「海内万民之為メ、有益之芸事御開之訳ト奉存候」が有名であるが、「芸事ハ、芸之高下ニ而 階級相立、其モノ身分貴賤等 不差構ハ当然之道理ニ付、公儀人並陪民・浪人打混シ、為相勤候様仕度……」に注目したい。

ここでは世間一般がまだタテ社会の差別構造のなかにありながら、それとは相対的に区別された《芸事》という科学技術を含む《学術世界》が画然として独自に存在するという宣言であって、芸事は専ら芸の世界だけにおける高下が問題とみなされた。こうして「学術・芸事」の世界が独自領域として自覚されていく。

2 外来文化の受容と日本語

はじめに述べたように日本においては、厳密な自国語辞典よりも先に、まず外国語辞典（仏和、蘭和、英和などの二か国語辞典）が国家の中枢部（＝幕府）から要求され編纂されてきた。日本の《近代化》を象徴する好例である。

「2カ国語辞書は異文化理解の辞書である。1カ国語辞書は文化レベルの表現である」（早川勇2001）といわれる。しかも英和辞書のように極端に語族の異なる二か国語辞書は、それだけ一層、文字通りその一語一語が異文化接触・対決・相互理解の結実に他ならない。

幕末日本のような鎖国国家においては、先進の異文化との奔流のごとき急激な接触により、先進文化がもつ言語・思想などの《座標軸》を借りて、初めて自国の言語や文化をも整理し得、自覚されやすく、自己の体系的理解が可能になってきた。つまり空間上も時間上も、独自文化（言語、文学、思想）の普遍的《座標軸》

をもたなかった我が国は、——いまなお同様かもしれないが、——《座標軸》も舶来であった*。

* 「近代日本において、世界経験の論理的および価値的な整序を内面的に強制する〔トータルな——引用者〕思想として登場したのが、明治のキリスト教であり、大正末期からのマルクス主義にはかならない」（丸山眞男「日本の思想」1957）。この両者は正反対の立場に立ちながら、《普遍的座標軸》という共通する精神的役割を担うことになった。明治期の日本英学史にとって、キリスト教の占める比重が格段に重いのは、まさにこの点にかかっている故である。

この点で、海図なしに、いきなり遠洋航海を命じられた『英和对訳袖珍辞書』編纂事業も、当然のことながら先行の諸外国諸辞典をモデルとし、それを底本にしたり引用したり寄せ集めて作成された。しかもそれは《外国語辞書》であっただけでなく、同時に新造近代語を生む《国語辞書》の役割さえも負わされていたのである。本格的な近代日本語辞典である『言海』も、大槻文彦が当初、『英和大事典』明治6年春に第二巻AI～ANの部分を書き（その原稿が早稲田大学図書館に残されている）、その文法（＝座標軸）を参考にして、はじめて国語辞典編纂へ向かい得たのであった*。

* 『言海』も——明治8年から編纂に着手した。——その範を自国の辞書に仰ぐことなく、アメリカの英語辞書によっているというのは、日本近代史の転換を迎える時とらみ合わせるとき、きわめて象徴的であろう（『杉本つとむ著作選集』第8巻、p. 448）。実はウェブスターだけでなく、ヘボンの『和英語林集成』も用いられたという。

ここで視野を拡大してみると、古代の日本は、高度に発達した仏教や儒教に代表される大陸文化と、それを伝える言語（漢字・漢文）を移入したが、当時の日本語をもってしては先進文化

の概念を表示しえなかったので、外国語である漢語漢文をもって考え、かつ記述した。いろいろ漢字の採用をはじめ、漢語が日本人の思想の機関とされ、やがてその移入漢語も漸次日本化され、かな文字も生み出した。日本人が漢字文化に接したのは古墳時代に遡る古い時代であろうが、それをそのまま受容したのではなく、音のみでなく、その訳語である訓を併用して国語化するのに長い試用期間をへて、「格別の苦心」(白川静2002)を要した*。

*わが国のことばに適應するようにして受容された中国漢字は、すでに日本国字としての漢字であり、記号が同じでも元の漢字とは構造的な意味は別であろう。しかし、国語化された王朝完成期の時代意識は、漢字が中国で生まれた時代と遠く隔たっていたにも拘わらず、ふしぎなほど類同性をもつものであったと考えてよいという(白川静 p. 160)。そして後に西欧語の翻訳に際し二度目の大苦心をしたが、——したがって漢語・和語・西欧語という三元の三重三複線言語として近代日本語は誕生したことになる(石川九揚『漢字の文明、仮名の文化 文字からみた東アジア』2008)。——その事情とはまた大きな相違がある。

伝来の母国語(ここでは中国および日本)の意味と、洋語の翻訳語の意味と二重性(混在)のもたらす複雑さは、「自然」という語の来歴——精神を含む東洋的自然(ジネン)と、精神に対立するデカルト的nature(自然)との相違——をみても明白である(柳父章『翻訳語成立事情』)。

こうして日本の上層身分は古来、輸入外国語(漢語)とともに、それが「外国語」であるという意識を希薄にしながら、(とくに文語体と口語体との言文一致が成る明治期まで、)漢字との二重生活をしてきたわけである。日本史は上代いろいろ、翻訳史という一面を有してきた。

異文化言語とともにあるという事情だけならば、かつて西欧人がギリシャ・ラテンの古典語

を外から受け容れ、それにより思索した事情と同じであり、東西いずれも異文化接触をつうじて言語や文化を理解し、それを通じて自らをも発展させてきたが、日本人が蘭語(のちに英語)を学ぶ体験は、以前に漢語を採用し日本化できた事情とは決定的に異なる。それは比喩的にいえば、「西欧人」が自国語に受け容れられた限りでのラテン語を用いて、それとは語族をはじめとする伝統を全く異にする「東洋」のインド思想を記述するような、想像することさえ西欧人にはできない言語上の革命を日本は行ったからである。それは類似共通する儒教圏に属さず、印欧語族とは全く言語伝統・文化系列を異にし、従って漢語のように日本化できない近代西欧語の観念を、どうやって受容し、それを表現するかという大問題であった。西欧世界で、たとえば英蘭辞書と蘭英辞書とがしばしばセットで出されるのは、同族言語間だからであるのに対して、蘭和、英和辞書は異なる語族間での二か国語辞書という、実はとんでもない代物であった。以後の近代日本語は、先立つ語族、語源(思想)から切断させられたが(=魂を奪われるに等しい古典的教養の非連続、近代化の実相)、今度は新造語の背後に予想される西欧外国語をも思いうかべつつ——たとえば「哲学」と聞けば‘philosophy’のことだなと思いをめぐらせて——会話している場合も少なくない。

上代にはじまり漢字、遣唐使派遣以来の漢学と、その教養の上で学習を容易にした蘭学、この二者なしには急速な日本の近代化は到底考えられない。しかしこの二者の相違もまた大きい。漢学は古代いろいろ国家の保護・奨励のもとに受容され、儒教道徳に立脚して儒者や僧侶によって撰取された。それが為政者の採用する支配管理の学であったのに対して、蘭学(洋学)は鎖国下の幕藩体制にあって、さまざまな制約のも

とで、通詞も含め、まず主として民間有識者の手で受容・学習された。漢学が官学（＝《伝統倫理》の支配下）であったのに対し、洋学は一般社会の民間の学問として生まれたことは、その内容が新たな近代社会を準備する《近代倫理》の所産（＝実学）の移入であったこととも対応している。

「漢学は章を飾れる文ゆえ、その開け遅く、蘭学は実事を辞書にそのまま記せしものゆえ、取り受けは早く、開けは早かりしか」（杉田玄白『蘭学事始』）。

西欧近代の自然科学用語は東洋産ではないから、たとい中国と同文の日本でも、和語には置き換えにくい。しかし一部の人ではあれ蘭語を知っていた近世日本は、いきなり「義訳」できないものもカタカナ語で「音訳」し伝えることができた。そして幕末に英独語などの原書を直接読む以前に、それらの原書の多くは既に蘭語を通じて和訳（重訳）されていたので、オランダ系統のこの翻訳借用語を採用できる利便が備わっており、ここでも日本の近代化に果たした蘭語の役割は大きい（斎藤静『日本語に与えたオランダ語の影響』1967）。しかし分野によって大きな偏りが生じるのは、鎖国中の幕府のもとで許された蘭書は砲術や医書などに限定されていたから、禁書にあたる宗教関係や社会科学用語をも含む英和辞書などの編纂においては、初発からあらたに訳さねばならなかった。

しかもこの場合、特殊技能集団である通詞職や蘭学専門学者だけに必要な「蘭語」習得ならまだしも、国民全体が西欧近代世界を丸ごと認識する必要から、英語国語化論を斥ける以上、国民にとっての新国語・近代語彙創出という一大事業に遭遇した。それは英学以前の蘭学時代から開始されていたが、世界語（英語）との接触により飛躍的に必須となる。ここに蘭学と

英学以後との事情の相違がある。

〔義訳、創作的翻訳〕

すでに『解体新書』はその凡例において、「訳に三等有り。一に曰く翻訳。二に曰く義訳。三に曰く直訳」といい、これを説明して岩崎克己（『前野蘭化』1938）は、義訳とは「両国語の言語に於いて一致した概念が無いために生ずる、創作的翻訳とでも名付けるべきところのもの」であり、『解体新書』の術語の大部分は義訳（むしろ翻訳的義訳）を以て成立していると分析している*。翻訳に適当な和漢の用語がなければ新しくつくらねばならず、当然それには高度の漢語素養と科学の知識とを必須とするが、とかくこの両者は矛盾し、漢語の素養が逆に西欧の言語文法、科学思想の理解に困難を来すことすらある。

*その詳細を把握するには、杉田玄白らの訳が中国の医学術語を以て、どこまで直接に「翻訳」したのか、それらを《適宜取捨配合》して造りあげた「義訳」かの限界を精査しなければならず、そこまで力が至らなかったと岩崎氏はみずから遺憾としている。訳語史は、思想史だと言っても過言ではあるまい。

3 タテ社会における洋語の和訳

日本の選択は、外国語の音訳でも和語の転用でもない、二字組み合わせの新造語を作成していくことであった。再度ここでも漢字・漢語を活用し、日本語化した漢語の新しい組み合わせによって和製漢語を新造したが、その際、漢語としての伝統を振りはらい、その語が従来有していた民族体験や原思想からは断絶することにならざるをえなかった。

たとえばreason, Vernunftといった哲学用語を表示するために、「理」と「性」の二語を結合して「理性」が作られたが、その語がかつ

て有していた概念内容とは断絶し、初めより抽象的概念を表示するものとしてそれは現われる。「この種の革命は、はなはだしく性格を異にし伝統を異にする他国の文化を受け容れてそれにおのれを適応させようとする時に、恐らくやむを得ない、また最も賢明な方法であったのであろう」(和辻哲郎「日本語と哲学の問題」1929, 1935)*。

*同じように西洋の衝撃を経験しながらも、中国においては、かくも急速に「理学」という言葉が、西洋自然科学を意味するものとして定着し流布するという事態は、およそ考えられないものであった。……宋学の中核というべき「理」に、「末」であり「用」にすぎない西洋自然科学が入りこむ余地はありえなかった。まして「理学」が「西学」としてかわられることは夢想だにしえなかった所であろう(宮村治雄『理学者 兆民』1988)。

このことは、単語の上だけのことではない。近代日本の最初の倫理学論文といえる井上哲次郎の『倫理新説』(明治16年)を例にすると、それは東洋儒学の系列ではなかった。直覚教と主楽教〔功利説〕を統合し進化論的理想主義をとる同書では、実は西欧倫理学Ethicsの問題構成に従ったものであった(それを子安宣邦は「倫理学問題」「大文字倫理学」と呼ぶ。『漢字論』2003)。その路線が現在にまで至る《翻訳倫理学》の系列である。ところが明治中期以降、伝統的道德がますます崩壊し続け、近代日本人の「道徳的空白状況」(子安)、「無倫理的な索漠とした世相」(川田稔)に直面してくるとき、果たして輸入「倫理学」は、日常生活の悩み(=現実の「倫理問題」)を救えるだろうか。それでは救えないと悟ったとき、その間隙をうめるべく立ち現れたのが教育勅語につらなる「国民道徳論」の系列である*。(この同じ問題意識に目覚めた柳田国男は、ここから民俗学を立

ち上げていく。)

*「西洋の倫理学は日本のやうに国民道徳を研究する必要はなかったのであります。西洋の倫理学は西洋の学者が色々な倫理学上の実事(=習俗)を土台として研究して来たものであります。日本人が倫理学を研究するに当っては国民道徳を一の重要な事実として研究せんければならぬ」(井上哲次郎「国民道徳大意」明治44)。

以後、近代日本は翻訳倫理学と国民道徳論という二重の課題の前に立たされる。期せずして英和辞書Ethicsの訳語は、——「倫理学」と「修身齐家ノ教」——統一されぬままの二系列の姿を、初発から提示していた。「倫理学」というEthicsの新しい「義訳」は、伝統的儒教用語の「転用的再生」(森岡1991)による翻訳として成立した。その場合、後者を抑圧し、その原意(伝統的習俗とヨリ密接な「倫理問題」を含む)を棄てる——近代化——と同時に、西欧文明を移植する新造漢語として登場したのであった。「教育」(Educationの訳語)と「教学」との関係も、これと類似している。

両者の統合は、日本における下からの近代市民社会形成と、その普遍主義的倫理構築となるはずであったが、それを目指すF. ウェイランドから、福沢諭吉、大西祝へと続く系列は、国民国家の形成(=富国強兵)を急ぐあまり、その後もたえず排除されてきた。

「ただ政府ありて未だ国民あらずと言うも可なり」(『学問のすゝめ』第四編)。

福沢諭吉が『学問のすゝめ』(明治5~9年)で利用活用したF. ウェイランド(Francis Wayland)の“The Elements of Moral Science”1870の「モラル・サイエンス」という語は日本語に訳しづらい。そういう学問自体が日本には存在しないからだと云えば言い過ぎかも知れないが、関係深いと思う。幕末の箱館にもあっ

た同書を、堀達之助は函館文庫で「大修身学」とか、「礼節書」とか名付けているのも興味深い、その内容は「修身」とは逆様のものである。福沢もそれを「修身」と訳しているものの、それが儒教倫理とは対称的なヨコ社会の道理であることについてはよく理解していた。

かれは『学問のすゝめ』初編で実学の諸例をあげつつ、経済学に続けて「修身学とは身の行いを修め人に交わりこの世を渡るべき天然の道理を述べたるものなり」と云っている。最初は修身であるが、直ちに「人に交わり」「この世を渡る」(＝ヨコの交際)となり、その「道理」が「天然の道理」(＝普遍性)とされていることが注目される。

日本では未だに「道德、倫理」という言葉には上から思考や行動を規制する儒教的ベカラズ集(＝修身)の意味合いが絡みついているが、英国流の「モラル・サイエンス Moral Science」とは上下関係の掟(＝特殊主義)ではなく、近代の——形式的には——普遍的な、国境を越えたヨコの人間関係、だから交際(社交)・交渉・交換・経済などと密接なルールを指している。英国では、この近代倫理学(Moral Science)からアダム・スミスの古典派経済学(＝市民社会倫理)が生誕していく(堀2006など)。

4 動詞から名詞へ(抽象名詞の成立) —経験の抽象化としての「思想」—

これらのことは「思想」というものを如何に捉えるかに関わる。「19世紀半ばの学問を一つの完成体として見て、固定して訳語を作り、それによって抽象的思考をしていくほかないとすれば、およそ「思想」なるものを、何よりもまず日常経験の抽象化として考えること自体が

困難になる。

今日では、「哲学」という訳語でのみ普及していて、かつて中江兆民らが愛好した「理学」「窮理学」という訳語は忘れられている。訳語内容として遙かに優れている後者が忘れられ、なぜ西周の訳した意味不明な「哲学」という表現が生き残ったか。彼が官学・政府機関と密接な関係を有したことによるとも云われており、東京〔帝国〕大学文学部の「哲学科」設置(明治10年)で確定した*。

*「哲学」にせよ「理学」にせよ、それらの言葉は、西欧との出会いを通じて、日本の思想的伝統をどのように引き継ぐのか……単なる言葉の問題としてだけでは片づけられない、いわば文化の質にかかわる問題が伏在していよう。例えば、これを中国と比較してみれば、その日本の文化的個性による刻印は明らかである。(宮村治雄, 1988; 斎藤毅『明治のことば』1978; 鈴木修次『文明のことば』1981)。

このように、「哲学」という表現でのみ普及している‘philosophy’は、ギリシャ語の *φιλοσοφία*, ラテン語の *philosophia* に淵源する, *philo* + *sophia* の合成語であるが、ホメロスやヘーシオドス(BC. 700ca)において「σοφία(ソフィア)」とは、大工が家を建て、船頭が船を操縦する智慧、知識を意味した日常語であった。動詞としては、「貴方はフィロソフェインしながら観るために国々を歴遊してきた」というソロンへの言葉に見出される。それは「哲学しながら」ではなく、「見聞を広める」の意味、智慧を愛し求めての意である。これらは、いずれも生活に根をもつ日常語であって、それを根底に持ちつつ、ヘーラクレイトス以下、プラトーンらにより、「愛智する人々」「智慧への激しい愛欲」という特殊な意味、「philosophia 哲学」として使用されて行く(川田熊太郎『仏

教と哲学』1957)。

この例でも明らかなように、ギリシャ人の長い生活のなかから生まれ成長して、初めて特殊な学問として「philosophia」が成立した。すなわち初めに日常語の動詞として生まれ、のちに名詞として学術用語となる。これが言語の通常のある方と言えよう。かつて古在由重が、日本では「哲学」という言葉は、日常語としては使われず、哲夫とか哲治とか、名前ぐらいにしか使われないが、イギリスなんかでは「この家の家主のフィロソフィーはどんなものか」といった会話は自然なんだ。〈考え方〉〈生き方〉みたいな感じなんだと、語っていたそうである(川上徹「星座」の中の古在由重、『評論』163号, 2007.10 日本評論社)。

そのような日常語として一般人の経験や過程を欠き、いきなり既製品としての学術用語を訳語として上から移入した——したがって狭い学者社会の隠語となりやすい。——日本などの場合は、前述のような抽象的文化レベルだけの文化接触という悲喜劇を生んでいくことになる*、*。

*ほとんど唯一の例外といえる福沢は、現実のなかに生きている日本語を用いて……その意味を変え、現実そのものををも変えようとした(柳父章『翻訳語成立史』岩波書店1982)。

**幕末から現代に至る「時期の日本の語彙は、訳語によってほとんどその土台が形成された」(森岡建二『改訂 近代語の成立』明治書院 1969)。「学術言説上で使用する漢語語彙とはほとんど欧米語から日本語への翻訳語である」(子安宣邦『漢字論』あとがき 岩波書店 2003)

ある程度それは歴史的必然であったが、それがどんなに異常なことであったか。経験世界での人々の交流、討論、深化を経ないで、観念だけが暗記の対象として一人歩きし、学者だけで

なく一般庶民も、物事の本質に遡って《考える》習慣——根拠を問う精神、即ち philosophy——を奪われながら、いわゆる《近代化》が進行してきた。「われわれは本当に日本語で勉強しているのか」と問いかける内田義彦氏のことばは耳に痛い。西欧内部で近代化におくれたドイツ諸国の研究者が、ラテン語を離れて自国語で研究・交流し始めたのは、グリム兄弟らゲルマニスト〔ドイツ語・ドイツ文化研究者〕の活動に見られるように、——ちょうど Picard の英蘭辞書も出た——19世紀前半であったが*、それを後追いする幕末以来のわれわれは、今日でも「専門語が学者用語として日本語の外にあり、その日本語でない専門語を安易に使うことによって、かえって日本語のなかに生まれるべきもの(=思想)としての専門語をおしつぶしている、ということがないか。国民語をお互いの努力でつくることもせずに、学者語を使っていないか」(内田義彦1977)。

*英国最初の本格的な二か国語辞書は、ラテン語からの独立として英羅辞書、羅英辞書(15世紀半ば)に始まり、16世紀に仏英、伊英などの諸国語辞書ができて行くが、オランダ語は仏、伊と関係が深く、近代化のおくれたドイツと似て、英語との接触はおくれた。

「普通の人(コモン・ピープル)」を相手(念頭)にして、はじめて国民の関心を引きつける、現実に生起する諸課題に学問的にも対応できる。《生活=ことば=学問》を通底する課題(=倫理問題と倫理学問題との統一)が、ここにある。

参考文献

- 杉田玄白(1774)『解体新書』安永3(講談社学術文庫1998現代語訳)
杉田玄白(1815)『蘭学事始』文化12年(講談社学術文庫2000全訳注)

- Wayland, F. (1870) *The Elements of Moral Science*
 福沢諭吉 (1872) 『学問のすゝめ』明治5 (岩波文庫
 1942)
 井上哲次郎 (1881) 『哲学字彙』改正増補 3版
 井上哲次郎 (1883) 『倫理新説』博文館, 『明治文化
 全集』23巻, 思想篇; 日本評論社1992
 井上哲次郎 (1911) 『国民道徳大意』『日本教育史基
 本文献・史料叢書』5 大空社
 勝保詮吉郎 (1914) 『最初の英和对訳字書』『英語青
 年』32-1, 2 英語青年社
 和辻哲郎 (1929) 『日本語と哲学の問題』『続日本精
 神史研究』1935岩波書店
 岩崎克己 (1938) 『前野蘭化』岩崎克己 (東洋文庫
 上中下 1996)
 丸山眞男 (1957) 『日本の思想』岩波書店
 斎藤 静 (1967) 『日本語に及ぼしたオランダ語の
 影響』篠崎書林
 森岡建二 (1969) 『近代語の成立』明治書院, 1991
 内田義彦 (1977) 『アダム・スミス——人文学と
 経済学——』『著作集』8 岩波書店
 柳父 章 (1982) 『翻訳語成立事情』岩波新書
 宮村治雄 (1988) 『理学者兆民——ある開国経験の
 思想史——』みすず書房
 宮地正人 (1997) 『混沌の中の開成所』『学問のアル
 ケオロジー』東大出版会
 杉本つとむ (1999) 『日本英語文化史の研究』『杉本
 つとむ著作選集』8 八坂書房
 早川 勇 (2001) 『辞書のダイナミズム——ジョン
 ソン, ウェブスターと日本——』辞遊社
 白川 静 (2002) 『字書を作る』平凡社
 子安宣邦 (2003) 『漢字論』岩波書店
 安田敏朗 (2006) 『辞書の政治学——ことばの規範
 とはなにか——』平凡社
 石川九楊 (2008) 『図説◆中国文化百華, 第1巻 漢
 字の文明 仮名の文化 文字からみた東アジア』
 農山漁村文化協会
 (名古屋学院大学名誉教授, 倫理学・英学史)

解説 (堀) 目次

『解説「英和对訳袖珍辞書」原稿
 ——初版および再版——』(共編著 近刊)

解説 I (堀)

辞書の背景と 'We' (編纂者たち)

- 1 英和对訳袖珍辞書の背景
 - 1 公教育における母語の役割と辞典類
 - 2 先行の英和辞書編纂
 - 3 幕末の洋書印刷事情
- 2 英和辞書編纂と原稿史料
 - 1 編纂者, 校正者の新登場
 - 2 堀達之助の再版との関わり
 - 3 タテ社会における訳語の問題
 ——和製漢語(近代語)の始造——
 - 4 原稿史料にみる訳語比較
 ——Ethics, Democracy, Denizenを中心に——

『名古屋学院大学論集・社会科学篇』46-1 (09年7月刊)

解説 II (堀)

開国と『対訳』辞書

——異文化相互理解の証し——

- 1 蕃書調所の二面性
- 2 外国文化の受容と日本語
- 3 タテ社会における西洋語の和訳
- 4 動詞から名詞へ(抽象名詞の成立)
 ——経験の抽象化としての「思想」——